

領域「言葉」の考察(2)

一 話し言葉を補う絵本、物語の役割 一

藤原 桂子

(久留米信愛女学院短期大学)

はじめに

領域「言葉」は言葉の獲得の為に話し言葉を重視している。先の考察(1)において、話し言葉は人間の生きることと不可分、自然であり、基本的であり書き言葉の基礎となるものであるが、一方では、場面や言葉以外の多くの要因に支えられて成立していることを指摘した。

子どもの言葉の獲得は2つの過程を経ることが考えられる。①は、きわめて幼児期には言葉以外の要因に支えられて言葉を獲得していく。②は、場面や言葉以外の要因を、言葉に置き換えて(言葉化)言葉を獲得していく時期である。子どもの発達に伴い、知・情・意の働き(心的活動と称す)を言葉によって表現し伝達し理解する方向へ向かわせることが必要となる。したがって言葉化していく発達の為には、日常生活の話し言葉だけでは不備であるといわねばならない。

本論では、話し言葉の不備をごく自然に補うものとして絵本の役割を考えていく。

I. 言葉を成立させる要素

心的活動を言葉にしていく為には、子どもの耳にごく自然に頻りに質の高い言葉が入っていくことが必要である。日常生活の話し言葉でこれらを十分に果すには、次のような困難がある。①. 話し言葉は場面や言葉以外の要因に支えられて成立していることが多い。②. 言葉は媒体として用いられるので手段と考えられ易い。③. 日本人の伝統的な言語意識はややもすると話し言葉を軽視する風潮がある。④. 音声は消滅するので安易に感じられる。⑤. 日本語には独自のスタイル(主語の省略など)がある。

言葉は、本来、意味表現のものであるから言葉として意味を成さなければ、心的活動を表す行為としては不十分である。では、言葉が意味表現として成立するにはどんな要素を持っていなければならないかを次に述べる。

1) 音声

言葉はもともと音声を基盤にしている。音声は音素にまで細分できるが、音素それ自体は意味を持たない。言葉を構成する為に音素は集められ外形は音声形式をとる。現実の個々の言葉を支えるのは外形としての音

声である。

2) 意味

言葉の意味を支える小さい単位は単語である。しかし、単語は、それ自体文法的な役割を持たないから、無秩序な単語の羅列では言葉の意味は支えられない。節や文を構成し意味あるものとなるには一定のかたち(文法)が必要となる。

3) かたち

言葉は、音声と、かたちという骨組みを持つことにより意味表現を果すことができる。音声も意味も文法的な一定の枠組みに従うことによりかたちを持つ。

以上の事から、言葉として成り立つには、音声、意味、かたちが必要であることがわかる。これらは言葉を成立させる三要素である。音声は聞きとり易く、意味は明確で話の筋が通っていることが大切である。文法的であれということではなく心的活動を託すのに最小限必要な事柄を指すのである。現実の生活では、音声不明瞭でも、意味が不確かでも、話の筋が通らなくても私達は適当に補っている。これが話し言葉の実体である。言葉の獲得は、心的活動を表現し伝達し理解する行為を獲得していく事であるから、望ましい発達の為には、より良い状態でこれらの要素を整えた言葉に出会わせる事が必要である。

II. 言葉の要素を充たす為

心的活動と言葉は一枚の紙のように表裏一体であるから、生き生きした心的活動の為には言葉もまた生き生きしたものであることが望まれる。必要な要素が欠けていては困るのである。言葉の要素を充たす為に次の2点が考えられる。

1) 意識化

私達は、言葉を獲得して久しいので空気を呼吸するのよう言葉に自然に殆ど無意識に使っている。又、日常の話し言葉は、あえて言葉化しなくても言葉として機能している。いわば自然さに安住して安易に流れているといつてよい。そこで話し言葉の不備と言葉化することの大切さを意識することが望まれる。日常生活や保育の現場で、明瞭な音声、明確な意味、筋立てて話す事は大切である。しかしその反面、過剰な意識化は不自然さを伴う場合もある。言葉は人間の資質

と関わるものでもあるので、意識化だけで問題が解決するものではない。

2) 絵本、物語の利用

絵本は、子どもに読ませる本でなくおとなが子どもに読んで聞かせる本である。人間が人生最初に出会う文体は、絵本の文体であり、絵本は繰り返し読んでもらうから、絵本の文体が人間の意識に与える影響は恐ろしい程であるという指摘は重要である。ここには、①絵本はおとなが選ぶもの ②おとなが読んで聞かせるもの ③繰り返し読むもの ④文体は人間の意識に影響するもの、という指摘がある。①は、絵本を選ぶことはそれによっておとなの価値観が示される。この価値観は絵本を通して子どもの価値観を形成することを意味する。②と③は、人間の音声の大切さを示している。音声のみがもつ特色は子どもの心に沁みていく。人間は生れた瞬間から外界の雑多な音の中から音声のみを吸収していくと、言語音の神秘さをモンテッソーリは指摘している。おとなは絵本の言葉の背後にある世界を読み取って音声に託す事が可能である。明瞭な感情豊かな音声で、意味のはっきりした筋の通っている話を繰り返し読んでもらう事は子どもの言語体験としてきわめて大切である。④丸谷才一は、絵本の文体は名文でなくても生気に満ちた文章でなければならない、それは人間の精神と文体との関係を教えると指摘している。

以上のことから、良い絵本、物語をおとなが選び、繰り返し読んで聞かせる事は、話し言葉の不備を補い、言葉を獲得していく上で大切であると考えられる。

III. 話し言葉の不備を補う絵本・物語

話し言葉の不備を補うのに、絵本を読んで聞かせるのが有効であることが判ったが、絵本を読んで聞かせるにあたり必要な事柄を次に述べる。

1) 絵本を選ぶ

絵本、物語についての秀れた評論は多い。その中から良い絵本についての指摘を幾つかあげる。① 聞く主体は子どもであるから子どもにとって楽しいもの、それは確かな存在感を持つ。(松井) ② 単純、率直、健康であること(松岡) ③ 子どもを幼稚扱いしていないこと(瀬田) ④ 確かな構成で言葉の背後にある世界が感じられること(瀬田) ⑤ 不必要な擬態語を入れて子どもっぽくしないこと(丸谷) などがある。良い絵本は、絵と文が相まって秀れているという。(ここでは絵本については省略す)鳥越信は、一万冊の絵本のうち四分の三は良くないと指摘し

ているから良い絵本を選ぶのは容易ではない。しかし、上記のような観点に立って絵本を厳選していくと、選ぶ過程で言葉の意味の明確さ、筋立ての確かさは、否応なく吟味されると考えられる。絵本を選ぶとは、おとな自身の資質と感性が問われることでもある。

2) 読み手の熱意

絵本の読み手が絵本を読むことに注ぐ情熱はきわめて大切である。これは、言葉の背後にある世界を子どもに橋渡しする役目を担う。その為には繰り返し読み込むことが大切で、絵本の世界にどれだけ深く入り込んでいるかが読み手の姿勢として問われる。何度も黙読し読み込むうちに、絵本の世界の輪郭は鮮明となり、骨格だけでなく細部の特徴も見えてくる。声を出して読むのはそれからでも遅くはない。確かな手応えを把んでから音声を伴って読むのは大切である。読み込む過程で音声だけが持つ特色もさまざまに吟味され、洗練されていくと思われる。

3) 自然体であること

良い文体は、読み手に妙な技巧を要求しない。すでに文体自体が吟味され、妥協を許さない所まで単純化されているからである。読み手の音声も又、作品の世界を伝える為に読み込んでいく過程で周到にコントロールされ洗練されていく事は先に述べた。音声は心の働きを写し出すから、読み手の熱意も又音声に写し出される。このようにして絵本を繰り返し読んで聞かせていく時、これらは絵本の文体としてではなく、読み手自身の声として子どもの心に沁みていくと思われる。言葉が人間の精神を創るという真摯な営みに、不自然な技巧は不要であると考えられる。自然体で読むというのは、ぶつつけ本番で出来ることではないのである。

以上の3点から、話し言葉の不備を積極的に補うだけでなく子どもの心的活動を生々とさせていく為に絵本、物語を繰り返し読むことはきわめて有効であることが判る。そして、この実行の為には保育者の資質が問われ多くの時間と労力を必要とする。

むすび

領域「言葉」では、言葉の獲得の為に話し言葉を主体に置いている。しかし、話し言葉は、特に心的活動を言葉化していく際に、音、意味、かたちの面で不備であるといわざるを得ない。この事実を認識するのは重要である。話し言葉の不備を補う最適のものは絵本、物語である。更に具体的に必要な事は良い絵本を選ぶ、何度も読み込む、自然体になるなど、保育者の資質、姿勢が厳しく問われている事などが判った。